

## 基 調 講 演

テーマ：環境の時代と建築の世界

講 師：鳥取環境大学 建築・環境デザイン学科 教授 中村 貴志



### 略 歴

高松市仏生山に生まれ(1947)、京都市左京区で育つ  
京都大学工学部建築学科卒業(1971)、同大学院修士課程・博士課程修了、工学博士、一級建築士  
フランス国立マルセイユ建築大学名誉教授、ISO14001 (JAB,EARA,AINSI-RAB 国際環境審査員)

### 研究活動・著書

専攻:【建築論・建築設計】 主著:『建築論の射程—ディアテシスのアイデア』[ I , II ](2000,2001)  
近著:『ハイデッガーの建築論』(2008) 論文:「建築論の課題と場所の問題」など多数  
建築作品:石川県立高松病院ソーシャルセンター、関西日仏交流会館など約150件  
ISO認証取得支援:ISO9000 (約250件)、ISO14001 (約70件)など

### 講 演 概 要

建築(ἀρχιτεκτονική τέχνη)の活動は、古代のギリシア以来、「諸々の技術の統合」と考えられてきました。古代のローマでは、そのような統合の原理が「強(firmitas)・用(utilitas)・美(venustas)」に求められました。このような「建築の理念」が、西欧の文化を貫いて歴史的に継承されています。我が国でも、およそ明治時代から、建築の教育を通じてこの理念が受け継がれています。

しかし、科学技術の目覚ましい展開と近代産業の広範な体系が、現代の世界にも、きわめて重要な問題を投げかけています。「環境の時代」といわれる現代、地域の歴史と現実とに根ざした建築は、いったいどのようにして可能でしょうか？

ここでは、まず、ウイトルウィウスの『建築書』(BC.ca25)に析出された「ディスポジティオ(dispositio)」の概念に着目したいと思います。その定義は次のようなものでした。—Dispositio autem est rerum apta conlocatio elegansque e compositionibus effectus operis cum qaulitate. Sapecies dispositionis, quae graece dicuntur ἰδέαι, sunt hae, ichnographia orthographia scaenographia.

実は、いわゆる「シムムメトリア συμμετρία」と同様に、この概念の解釈が西欧のあらゆる建築理論を導いてきました。中世の世界では、その解釈がキリスト教の神学に覆われましたが、ルネサンスから近世のアカデミーや近代のボザールを経て現代の多様な建築思想にも、この概念の歴史的な残響が認められます。私の研究は、その意味の根幹を《適所性の課題》として総括することになりました。「ディアテシスのアイデア」は、《森羅万象の自己実現》という東洋の理想にも、遙かに呼応するように見えます。皆様には、スライドの資料でそのイメージの一端に触れていただきたいと思います。

さて、仮にでも、このような「建築の思想」を現代の鳥取県に適用するとしたら、いったいどのようなことになるのでしょうか？ 鳥取には鳥取にふさわしい建築の活動がありえるのでしょうか？ およそ、地域の歴史にも文化にもほとんど無知な私に、鳥取の将来を語る資格があるのでしょうか？

風光の明媚な山陰海岸がわれわれにひとつの可能性を与えてくれます。鳥取の空は美しく、海は深くまた激しく白い波間を見せてくれます。「かにナシ砂丘」のこの大地にも、明るい未来の鼓動が潜んでいます。環境の問題は、いつでもどこでも人間の課題です。自然の風景の只中に人間の生活の世界を切り開くこと、それが建築の活動の本来の姿です。ジオパークの計画が、私たちの次の世代を豊かに支えてくれるのではないのでしょうか？